色の哲学における「開示」および「透明性」

――色についての日常的理解と科学的理解の対立――

田中凌

1. 「開示」・「透明性」はなぜ問題となるのか

色は我々にとって身近なものである。ほとんどの人にとって、世界は様々な色で溢れており、我々は他人とお互いの服の色について会話したりする。我々は色がどのようなものであるかについて「日常的」な仕方で十分に理解しており、色について他人と会話するときになんの困難もないということにもそのことが現れているように思われる。

一方で、私には色について知らないことが多くあるということもまた正しいように思われる。色に関する「科学的な」知見がそれである。例えば、太陽光のもと、標準的な観察者に赤く見える物体はこれこれの物理的組成を持つ、といった事実について私はほとんど何も知らない。知らないというだけならまだしも、このような色についての「科学的」理解は、時に我々の「日常的」理解と対立することすらあるように思われる。色の哲学における中心問題の一つは、色についての日常的理解と科学的理解との対立についてどう考えるべきかという点にある(1)。

このような対立の一例として、色に関する「開示（revelation）」という考えをめぐる議論を挙げることができる。「開示」は、直観的には正しく思われる以下のようなテーゼによって表現されうる。

> 鮮黄色の本性は、鮮黄色のものを対象とする標準的な視覚経験によって、完全に開示される。(Johnston, 1992, p. 223)

このテーゼによれば、例えば、赤いリンゴを見るという経験を私が持つとき、私はリンゴの赤さの本性、あるいは本質(2)を知る。リンゴの赤さを知るためには、私はただ赤いリンゴを見るということを実際に経験すればいいのであって、それ以外には何も必要ない。

このテーゼは、我々の色についての日常的理解を捉えているように思われるが、科学的理解とは対立する。例えば、リンゴの赤さとは、リンゴの物理的組成にほかならないというもっともらしい「科学的」前提をおいてみよう。赤いリンゴを見るという経験は、リンゴの物理的組成に関する科学的事実によって「説明」される。そのような科学的事実をリ

ンゴの赤さの本性とみなすなら、それは明らかに私に開示されていない。端的に言って、「説明と開示はともに真ではありえない」(Johnston, 1992, p. 222)ように思われるのである[3]。

「開示」を擁護する論者はこのような反論に答えなければならない。この問題をめぐる議論で注目すべきはCampbell(1993)の議論、それに対するByrne & Hilbert(2007)の批判、およびCampbell(2005)の再応答である[4]。Byrne & Hilbert(2007)は、Campbell(1993)が「開示」を擁護しているとみなし、それに対する批判を加える。これに対し、Campbell(2005)は、1993年の論文から一貫して自分は「開示」ではなく「透明（transparent）」という語を使用しており、両者は別の概念であるという論点から応答を始める。本論はこれらの議論を中心にサーヴェイすることで、「開示」と「透明」という概念、および両者の違いを明らかにし、色についての日常的理解と科学的理解の対立の一側面を明らかにすることを試みる。

2. 諸立場の整理、「開示」の意味

Campbellの議論を見る前に、彼の立場が色の哲学という分野において占める位置を理解するために、色の本性をめぐる問題について提出されてきた諸立場の整理をしておこう。それらはプリミティヴィズム（primitivism）、還元的物理主義（reductive physicalism）、傾向性主義（dispositionalism）、投射主義（projectivism）、主観主義（subjectivism）として整理できる[5]。

プリミティヴィズムによれば、色は物体が有している（あるいは有していると見える）質的な性質それ自体である。物体の持つ色は他のものへと還元したり分析したりすることができるものではなく、その意味でプリミティヴなものである。色の本性は、物体の物理的組成や見え方の傾向性に訴えることなく、それを日常的に経験することだけから完全に理解される。それに対し、還元的物理主義は色を物理的組成へと還元する。リンゴの赤さとは、例えばリンゴ表面の物理的組成にほかならない。傾向性主義は色という概念を分析し、色は例えば「標準的状況のもと、標準的観察者にとって赤く見える傾向性」とされる。

以上の立場は、色は何らかの形で我々の心とは独立に存在するという見解を共有している。物体はプリミティヴな性質としての色を持っていたり、赤さであるところの物理的組成を有していたり、赤く見える傾向性という性質を有していたりする。それに対し、投射主義と主観主義は、色は主観的性質であると主張する。主観主義によれば、色は単に我々の経験の質としての主観的性質である。投射主義は、色は主観的性質であるものの、我々の視覚経験はあたかも物体がその性質を持っているかのように表象していると主張する[6]。

以上が色の本性に関する主な立場である。さらに、「開示」の意味の詳細をもう少し明確化し、さらにそのプリミティヴィズムとの関係を簡単に整理しておこう。「開示」の意味に

ついては Stoljar(2009)による、3 つのテーゼからの整理が分かりやすい。

(1)　u-開示：ジョーンズがタイプ E の経験が何であるか理解している（understands）ならば、ジョーンズは E の本質を知っているか、知る立場にある。
(2)　e-開示：ジョーンズがタイプ E の経験（experience）を持っているならば、ジョーンズは E の本質を知っているか、知る立場にある。
(3)　ジョーンズがタイプ E の経験を有しているならば、彼はそのことによってタイプ E の経験が何であるかを理解する(7)。

(1)は経験の理解と本質についての知識についてのテーゼ、(2)は経験と本質についての知識の関係についてのテーゼ、(3)は経験と経験の理解についてのテーゼである。(1)と(3)から(2)は導かれうる。Stoljar は、u-開示を認めるものはテーゼ(3)もおそらく認める（その結果 e-開示にコミットする）であろうとの想定のもと、「開示」をめぐる問題は u-開示についての議論を中心に論じられるのが妥当だと提案する。

「開示」へのコミットはプリミティヴィズムの擁護を動機づける。もし、単に色を経験することが色の本質を知るということを導くなら、色は我々が日常的に捉えているそのもの以外ではありえないように思われる。この考えによれば、色についての科学的見解はすべて付随的な事柄であり、物体が有するプリミティヴな性質としての色こそが、色が何であるのかという問題への答えである(8)。

以上の整理を踏まえて、次に Campbell の議論を確認しよう。

3. Campbell(1993)のプリミティヴィズム擁護

Campbell(1993)は、「色についての単純な見解（the simple view of color）」を擁護する。「単純な見解」によれば、色は我々の心からは独立に存在し、かつ色は我々にとって経験を通じて「透明」(p. 258)である。「透明」と「開示」との区別は 5 節以降で確認するが、両者はともに色をプリミティヴな性質とみなすことを含意する点では同様である。Campbell の立場は上記の分類ではプリミティヴィズムに位置づけられる。さらに Campbell によれば、物体の有するプリミティヴな性質としての色は、我々の知覚などといった色に関わる現象を因果的に「説明」するという役割も有している。

Campbell の議論は、「単純な見解」は日常的あるいは常識的考えであるという前提を反映している。彼はこれをデフォルトで擁護されるべき立場と考え、必要なのは反論に応答することだけだという態度をとる(9)。Campbell は色についての単純な見解に対する典型的

な二種類の反論を取り上げる。一つは因果性からの反論、もう一つは反転スペクトラム（the inverted spectrum）の可能性からの議論である。本論では特に前者だけを確認する[10]。

因果性という視点から「単純な見解」へと提出される反論は、色は知覚において何の因果的役割も果たしていないのではないか、という疑問に関わる反論である[11]。「単純な見解」によれば、リンゴが赤く見えるのは、経験において我々に透明なリンゴの「赤さ」が原因である。一方で、もっともらしい科学的見方によれば、我々にそのような経験を因果的に引き起こすものは例えばリンゴの物理的組成であるとされる。そして、そのような物理的組成を持つリンゴに一定の波長の光が当たり、反射し、それが我々の網膜に当たり、などといったプロセスを経て我々はリンゴが赤いという視覚経験を有するとされる。

ここで生じるのが、色の経験は「因果的に過剰決定（overdetermined）」(p. 262)されているのではないかという疑念である。色の経験は、物体が有するプリミティヴな性質としての色によって説明され、かつ物体の物理的組成、光の波長、我々の生理学的構造によっても説明されている。しかし、後者だけの説明で因果的説明は完結しているとは言えないか。そうであるならば、色は単にこのような因果的、物理的過程の随伴現象（epiphenomena）であり、我々の経験の主観的質に過ぎないのではないか[12]。

Campbell 自身指摘するように、色を見え方の傾向性と理解する立場は、この問題をひとまず回避することができる。色を傾向性として分析することは、その傾向性を実現しているものが何なのかということについては何も主張しない。それは物理的組成であると判明するかもしれないし、もしくは Campbell の言うようにプリミティヴな性質かもしれない[13]。

しかし Campbell は、色はプリミティヴな性質だと主張しているのであり、色を傾向性で分析しない。Campbell は「単純な見解」を擁護するために、上記の反論に答える必要がある。彼は二種類の仕方で応答する。一つ目は、反論はそもそも良い論証ではないということ、二つ目は、色が真正に因果的役割を果たす説明的文脈は存在するという反論である。

まず、Campbell によれば、「単純な見解」に向けられた因果性からの反論は、そもそも良い反論ではない。確かにこの反論は「単純な見解」に対し一定の問題を提出してはいるが、それは「単純な見解」に特有の問題なのではなく、「それぞれの特殊科学と常識によって与えられるすべての因果的説明にとっての問題」(p. 263)なのである。生物学、化学、心理学などこれらの特殊科学で与えられる説明は、基礎物理学の語を使っていないにもかかわらず真正な因果的説明とみなされうる。さらに、日常的な語による説明にも同じことが言える。このようなことを踏まえると、日常的なレベルの説明と、基礎物理学のレベルによる説明は、お互いに独立に一定の説明力を有する異なった二つの「説明の空間（explanatory-spaces）」(p. 262)を構成すると言えるのではないだろうか。

これに続いて、Campbell は二つ目の応答を提出する。彼によれば、一定の文脈においては、リンゴの物理的組成に関する事実を持ち出して説明するよりも、「リンゴが赤い」ということを持ち出して説明した方が、「より良い説明」となることがありうる。Campbell が挙げる例のうちの一つは、我々の「色視覚のメカニズムの進化の説明」(p. 264)である。色を識別することは生存競争において一種の価値を持つ（例えば、果実の熟れ具合や食物の痛み具合の判断など)。我々が進化の過程でこのような色を識別する能力を習得したことの説明は、色に言及して行うことが自然ではないか。例えば、未熟なリンゴは緑色を、熟れたリンゴは赤色をしており、我々の視覚はそれを識別できるように進化したのだと考えるのが最も自然ではないか。進化論的説明はこのように現象についての一定の説明力を持ち、またそれを基礎物理学的説明に還元することは不可能に思われる。

以上が Campbell の議論である。次節では、Byrne & Hilbert(2007)による「単純な見解」へのさらなる反論を見る。

4. Byrne & Hilbert(2007)の批判

Byrne & Hilbert(2007)は Campbell の言う「単純な見解」へ、上記のものとは異なった反論を提出している。本論に関係する論点は二つある。一つは、我々の日常的な色の理解は「開示」（あるいは「透明」）をサポートするものではなく、それらはそもそもデフォルトで擁護されるべきものではないという論点である。Byrne & Hilbert は、Campbell と同じく我々の日常的な色の理解を擁護する Yablo(1995)の立場と比較することで明らかにしている。もう一つの論点は、Campbell の「単純な見解」からは人間以外の動物の色知覚についての非説得的な帰結が生じるというものである。

先に触れたが、ターミノロジーに関する注意が必要である。Campbell(1993)では、「透明」が擁護された。Byrne & Hilbert は、「透明」と「開示」とは同じ意味であるとの想定のもと、「単純な見解」は「開示」にコミットするものと考え、それに対する反論を挙げている。Campbell(2005)は「開示」とは異なる意味での「透明」という語の特徴付けをより詳しくすることで、以下で見る Byrne & Hilbert による反論を回避することを試みる。この点については次節で確認するが、まずは Byrne & Hilbert の想定を受け入れて議論を見ていこう（本節では、Byrne & Hilbert にならって「開示」という表現で統一する)。

それでは第一の論点から確認しよう。Yablo(1995)の目的は Campbell のものと類似している。そこでは我々の日常的な色の理解はデフォルトで擁護されるべきもの（「素朴な見解（the naïve view)」）であり、それに対する反論を退けるということが試みられる。本論の関心からの両者の違いは、Yablo は「開示」を我々の日常的な色の理解によってサポート

されるものとはみなしていないということである。もし、「開示」が日常的な色の理解に含まれないのならば、それはデフォルトの見解ではない。

Yablo の議論は単純である。確かに我々は経験を通じて、色について何事かを知り、そしてその何事かは直接そのものを見るという経験なしには得られないものかもしれない。しかしこのことと、そのようにして知られるものが色の「本質」であるということは別のことである。後者は前者よりも強いことを主張している。Yablo は、単に後者を擁護しない。彼によれば、我々の「素朴な見解」は、ただ単に色に対する見知りによって、何らかの知識を得るということにしかコミットしない。これと類比的な例として彼が挙げているのは、人は化学の知識を一切持たずに、塩が何なのか理解することができるというケースである(p. 492)。塩の本質は化学によって決められるはずだが、そのような塩の本質について知らずとも、人は塩が何であるかは知っていると彼は主張する。

Yablo の立場は、「開示」にコミットしないプリミティヴィズムである[14]。このことは、「開示」へのコミットはプリミティヴィズムを含意するかもしれないが、その逆は必ずしも真ではないかもしれないことを示唆する。もしそうならば、「開示」が本当にデフォルトで擁護されるべきものであるのかどうかは疑わしい。

続いて Byrne & Hilbert は、動物の知覚からの反論を提出する。Byrne & Hilbert は、金魚の知覚を例として挙げており、この批判は Campbell にとってより深刻なものである。金魚の色の知覚は多くの点で我々人間と類似しているが、しかし金魚は我々が区別できない「色」を区別することができることが経験的調査により判明している。金魚の視覚は紫外線にほぼ近いような光を感受することができるが、これは人間には感受することが出来ない。この時、金魚は我々に見えない色が「見えて」いると考えるのが自然である。金魚のこの視覚について何らかの説明を与えることと、「開示」の間には、以下の様なある種の緊張が生じる[15]。

「開示」によれば、いままでに十分に色を経験してきた人間は、色の本性を知っている。Byrne & Hilbert によれば、そのような知識を構成する一つの要素は、それぞれの色が互いにどのような関係に立っているかというものである（例えば、「すべてのオレンジ色は赤っぽい」「紫色は黄色よりも赤に似ている」(p. 78)など）。このような人は、こういった関係から構築される色空間（color space）についての知識を持つ。

上記の事態は、金魚には人間に見えない色が「見えて」いるという自然な説明と対立する。上記の考えによると、ある色の本性は「我々の」色空間においてある位置を占めるということによって構成される。しかし金魚に「見えて」いると思われる色は我々の色空間に含まれず、したがってそれは端的に言って色ではない。このように、金魚だけに見える

色など存在しないということを「開示」は含意するとByrne & Hilbertは主張する(p. 94)。

また、「開示」を擁護する論者は、生化学的な類似点に訴えてこの現象を説明するという選択肢も取ることは出来ない。というのも、色の本性は経験においてのみ知られるのであり、したがって彼らは色の経験において我々が直面するものだけで説明を完結させなければならないからである。

何か代案はあるだろうか。Byrne & Hilbertは二つの代案を検討しているが、どちらも非説得的であると論じる。一つは、金魚は我々に見えない色を見るにあたって「幻覚を見ている」(p. 95)というものである。しかし、どのような理由で我々の視覚が正しく、金魚の視覚が間違っていると言えるのか。もう一つは、金魚は人間にはできない区別をしているものの、「それらは色ではない」(p. 95)と考えるべきだというものである。この考えによれば、金魚が視覚において人間と共有している部分だけが色と呼ばれるべきであり、紫外線に近い光に対して示す金魚の振る舞いは、色に対するものではない。しかし、物理的に違うものを視覚によって正しく区別している金魚の振る舞いを、色に対する振る舞いでないと考えるのは非常に不自然である。

端的に言って、Byrne & Hilbertの「開示」に対する批判は、我々の経験において色の本性が知られると述べることは、我々の色空間を特権化してしまい、他の種類の動物の視覚について適切な説明を与えることが出来なくなってしまうというものである。彼らはCampbellの「単純な見解」は退けられるべきだと主張する。実際、色を例えば何らかの物理的なものと同一視する立場は、上記の事例をうまく扱うことができるように思われる。

この反論は、「開示」に対して大きな問題を突き付けている。次に、Campbell によるこの反論に対する応答を見よう。

5. Campbell(2005)の再反論

Campbell(2005)の再反論は、彼が「透明」と呼ぶものと、Byrne & Hilbertが「開示」と呼ぶものとの区別を明確にすることから始まる。Campbellはもともと透明という言葉を使用していた。Byrne & Hilbertは、透明と開示とは同じ意味で使われていると想定しCampbellの立場を批判した。これに対しCampbellは、自身が透明と呼ぶものは、開示とは別の概念であり、この点を明確化することによってByrne & Hilbertの反論は回避できると論ずる。

Campbell は「透明性」を以下のように定義する。「色の経験は、それへの介入が観察者の経験を変化させるような、カテゴリカルな色の性質についての知識を提供する」(p. 110)。Campbellが挙げる例に即してこの定義を理解しよう。彼は、古いテレビを叩いて直すというケースを挙げる。このテレビは古いのでまれに音量が勝手に上がってしまうが、テレビ

の側面をいろいろに叩くことでこれを直すやり方を我々は身につけているとする。この時、我々はテレビの音量を直接操作しているのではなく、側面を叩くことによって、テレビ内部のメカニズムすなわち「隠された変数」(p. 106)に働きかけている。いわば我々は間接的にテレビの音量に介入しているのであって、直接それに働きかけているわけではない。

Campbell は、対象の色への介入にはこのような「隠れた変数」が存在しないと主張し、その意味で色は我々にとって透明であると論じる。例えば壁の色を緑から赤へと塗り替えるとき、我々は色に対して「直接」働きかけているように思われる。ここで私がすべきことはただ単に壁の「色を塗り替える」だけである。色を変化させる場合に、私は対象を構成している分子的構造といった、「隠れた変数」に働きかけているようには思われない。色の場合は、テレビの場合とは違い、我々から「何も隠されてはいない」(p. 107)。対象の色を変化させるにはどうすればいいのかという知識は、単に色を経験することだけから得られる。すなわち Campbell によれば、物体の有するプリミティヴな性質としての色は、我々が直接介入可能という意味で「透明」なのである。

ここで、色への介入に関する「知識」はいったいどのような種類の知識であろうか。Campbell はそれが命題的な知識であることは否定する。彼によれば、色を経験することによって得られる知識は、Russell の言う「見知りによる知識（knowledge by acquaintance）」のような、非命題的なタイプの知識である。

透明テーゼがこのように理解された場合、Byrne & Hilbert の批判（動物の知覚からの議論）は退けることができると Campbell は論じる。Campbell の議論は二段階である。まず彼は、色を経験することにおいて知られるものを色空間についての知識と考えている点で Byrne & Hilbert は誤っていると論じる。さらに彼は、仮にこの点を問題としないとしても、金魚は我々と同じ意味で「色を見ている」とは言えないということを主張する。

一つ目の論点について見よう。Byrne & Hilbert の批判は、色を経験することによって我々に知られることは、色空間についての命題的知識であると考え、さらにこれを色の本性と考えてしまうと、我々の見ている色だけが真正な色であるという非説得的な立場に至ってしまうというものであった。しかし、Campbell は、色を経験することによって我々に知られるものはそのような命題的知識ではないと応答する。我々に知られるのはただ、対象との見知りによって得られる「質的性格」(p. 110)の知識にすぎない。Byrne & Hilbert の反論は「透明」に対するものではない[16]。

さらに彼は、二つ目の論点として、そもそも金魚は我々と同じ意味で「色を見ている」とは言えないと主張する。ここでの議論は、彼が「心から独立に存在する対象の性質としての色」というものをそもそもどのように理解するかという前提に依存している。Campbell

にとって対象の色とは、それに対する直接介入が可能である性質として捉えられるのであった。

このような理解のもとでは、金魚は人間と同じ意味では色を見ているとは言えず、それには明確な理由がある。色を心から独立に存在する対象の性質として見るためには、それに対する働きかけが知覚にどのような影響をおよぼすかという「因果的な有意味性」(p. 108)の文脈のもとそれを理解していることが必要である。金魚は明らかに色をこのようなものとして理解してはいない。したがって Campbell によれば、金魚は物理的な違いに正しく反応しているものの、それだけではそれが「色を見ている」と言うのに十分ではないのである。このように、Campbell は色が経験を通じて我々に透明でプリミティヴな性質だということを、直接介入の可能性という因果的文脈のもとでの非命題的知識が我々に与えられることとして捉えることで、Byrne & Hilbert の批判を回避しようと試みた。

6. 「開示」と「透明性」

最後に Campbell(2006)の議論を参照しながら、「透明」概念および、それと「開示」との違いをさらに明らかにしよう。Campbell は 1993 年の論文で因果性からの反論に対して、色についての科学的説明に対する日常的説明の独立性、および一定の文脈における優位性を論じていた。さらに、2005 年の論文では色の直接介入可能性が強調された。これらの論点は根本で同一のものであることが以下の議論から明らかになる。

この論文で Campbell は、色についての日常的な理解を有するために必要な経験は、「諸対象の色に、直接介入が選択的に可能な側面として意識的に注意を向けている」(p. 31)というものであるということを主張する。直接介入の可能性が 2005 年の論文と同様にここでも強調される。すなわち、Campbell によれば、我々が有する色についての日常的理解は、対象の持つ直接介入可能な性質として色を経験するということに基づいている。

この見解に対する可能な反論を Campbell は取り上げる。反論は、我々は本当に色に「直接」介入していると言えるのかどうかというものである。つまり、我々が色に介入するとき、我々は実は物体の隠された物理的組成に介入しているのではないのか。問題は、色を変化させるという現象を説明するために、物体の有するプリミティヴな性質としての色か、あるいは物体の物理的組成に関する事実か、「どちらの変数の集合を使うのが正しいのか」(p. 42)ということである[17]。

ここで、「透明」がコミットする色の直接介入可能性と、1996 年の論文で取り上げた因果性からの反論とのつながりが明らかになる。我々は色に直接介入しているのでなく、因果的説明の文脈に置かれているのは物体の物理的組成だけであるいう反論は、換言すれば、

基礎物理学における説明のみが唯一の因果的説明であるという主張にほかならない。

この主張は、色の哲学においても、より広い文脈においても、議論がされ続けている問題である。例えば、Broackes(1992)は、色についての我々の理解は基礎物理学における説明には還元されない説明を含んでいるとし、「色の自律性（the autonomy of colour）」(p. 191)を主張する。すでに確認されたように、説明の還元の問題は、色の理解をはじめ、諸特殊科学を含む全ての説明の枠組みに適用されうるものなのである。Campbell が色に関する日常的説明の自律性の論証に成功しているかということの評価は保留するにせよ、すべての説明が基礎物理学における説明へ還元できるという主張は広く受け入れられているものでは決してない。

以上の議論を踏まえて、最後に「開示」と（Campbell の言う）「透明」という概念の意味を整理する。「開示」は、Stoljar(2009)の整理に従えば、色の経験を有することのみで色の本質についての知識が明らかになるというテーゼであった。これはプリミティヴィズムにコミットすることを含意するが、その逆は必ずしも真ではない（例えば Yablo(1995)は「開示」にコミットしないプリミティヴィズムを擁護しようとした）。また、「開示」へのコミットは色についての日常的理解と科学的理解の対立を生じさせる。

Campbell の言う「透明」は、第一に我々の色についての日常的理解の必要条件に関わるものである。彼によれば、我々の色についての日常的理解は、色を物体の直接介入可能な性質として理解していることを必要条件とする。このように「直接」介入が可能であるということがほかならぬ色が「透明」であるということの意味である。そして Campbell は、対象への介入による色の変化という因果的説明は基礎物理学における説明には還元されない自律的なものであると主張し、この意味で対象の持つ色はそれ以上還元も分析もされないプリミティヴなものである。

この Campbell の立場は以下の二通りに解釈しうる。一つ目は、色についての因果的説明は下位レベルの物理的説明に還元不可能だが、色それ自体は存在論的には還元可能だという立場、二つ目は、色は存在論的にも還元不可能だという立場である。彼の立場はどちらとして位置づけられるべきであろうか。Campbell は、色の変化は、物理的組成の変化にスーパーヴィーンすると主張する（Campbell, 2006, p. 43）。したがって、彼は存在論的にも色は還元不可能だと考えているととることができる。

Campbell 自身は明言していないが、彼の主張はよりラディカルに、色の哲学において前提となってきた存在論的前提そのものを問い直す考えとしても解釈できるかもしれない。その考えとはつまり、色は我々の知覚や介入とは独立に存在するのではなく、むしろそれは我々の働きかけと相互に依存し合っており、存在論的レベルで切り離すことが出来ない

というものである。Campbell は 1996 年の論文ですでにこの見解を示唆しているようにも思われる。彼は、世界の客観的記述は「主体の導入」(p. 259)なしには不可能であると論ずる。客観的世界とは、それを知覚する主体に言及することなく記述できるものであると典型的には捉えられてきたが、Campbell はその考えに疑問を呈している。

結びとして、Campbell の立場と、Thompson et al.(1992)などによって提唱された色についての「生態学的見解（the ecological view）」との類似点を指摘しておきたい。生態学的見解によれば、色を含む環境とそれを知覚する動物とは「根本的に分断されたシステム」(p. 222)ではなく、「本質的に相互依存する」(p. 245)ものとして捉えられる。この見解によれば色の存在論的身分を論ずるに当たって、知覚者とそれを取り巻く環境とを分断して語ることは原理的に不可能であるとされる。この考えは、色は世界の側にあるのか、我々の側にあるのかという二分法的前提に疑念を提出するものであり、色の「透明性」（直接介入可能性）を主張する Campbell の立場はこの考えと親和性を有するかも知れない。こういった立場によれば、色についての日常的理解と科学的理解は必ずしも対立するものでなく、それらはむしろ新しい存在論的前提の上で捉え直されるべきものとなる [18]。

註

(1) この問題は、歴史的には少なくともロックによる一次性質と二次性質の区別にまで遡ることができる。
(2) 本性および本質は本論では交換可能な語として使う。
(3) Johnston 本人は、「説明」を保持するために「開示」を諦めるべきだと主張する。
(4) Campbell(2005)は Byrne & Hilbert(2007)に対して応答しているが、ドラフトの段階でやり取りが行われたようで、出版年数は逆になっている。
(5) Maund(2012), p. 9。Byrne & Hilbert(1997)の Introduction、Byrne & Hilbert(2002)もほぼ同様に立場を整理する。
(6) 主観主義は、色を客観的世界から排除するという意味で消去主義（eliminativism）とも言われる。
(7) Stoljar(2009), pp. 121-122。この論文は、主に Lewis(1995) の理解に依拠した「開示」の批判である。
(8) 逆に、プリミティヴィズムへのコミットが「開示」へのコミットを含意するかどうかには議論の余地がある（本論 4 節を参照）。
(9) 色がプリミティヴな性質だということが本当にデフォルトの見解なのかには議論の余地がある。例えば Gert(2008)は、プリミティヴィズムを擁護するが、それはデフォルトの見解ではないとみなす。彼は、色の経験によって開示されるのは、色の本質の一部であるという弱いテーゼを擁護する。
(10) 反転スペクトラムの議論によれば、リンゴが私には赤く見え、あなたには私が緑と感じるような色として見られているということが可能である。この場合、リンゴが実際に有する色は赤なのか緑なのかという問題が生じる。Campbell は、反転スペクトラムはそもそも不可能であると論じ、この問題を回避する。反転スペクトラムと「開示」の両立不可能性は、Strawson(1988)などによって指摘された。
(11) Hacker(1987), McGinn(1983)などがこの問題を明確に指摘している。前者はこの問題を回避するプリミティヴィズムを擁護し、後者は傾向主義を擁護する。後に McGinn(1996)は、色はやはり傾向性とは見えないという単純な直感から、傾向主義を棄却し、プリミティヴィズムの擁護を試みる。
(12) 過剰決定問題については特に心の哲学において、心的因果をめぐって大きな問題となっている。包括的な議論については Kim(1993)などを参照。
(13) 例えば塩の水溶性は、ただ塩は水に溶ける傾向性があると述べるだけである。それがどのようなメカ

ニズムによって実現されているかは、後に化学によって示された。McLaughlin(2003)などは、色についての科学的事実を真面目に受け取るためには傾向性による分析が必要であると強く主張する。
(14) 本論 2 節の整理に従えば、Yablo はテーゼ(3)のみにコミットするということである。
(15) 色について発見された経験的事実と「開示」が両立しないということは一般的な問題だが、特に認知科学の成果を踏まえてこれを詳しく論じたものには Jakab(2006), Webster(2002)などがある。
(16) Byrne & Hilbert は、「開示」は色空間についての命題的知識を提供すると理解しており、Campbell は「透明」はそのような命題的知識が得られることにコミットしていないと応ずる。ただし、「開示」をそもそも命題的知識に関するものと理解するかという点には議論の余地がある。Stojar(2009)を参照。
(17) この反論は、対象の色を変化させることはテレビを叩いて直す場合と同じ事態であると主張することにほかならない。
(18) 生態学的観点から色の問題を捉え直す試みには、他に Matthen(2005)や、日本語の文献では村田(2002)などがある。

文献

Broackes, J. (1992). 'The Autonomy of Colour', in K. Lennon & D. Charles (Eds.), *Reduction, Explanation and Realism* (pp. 191-225), Oxford: Oxford University Press.
Byrne, A. & Hilbert, D. R. (1997). 'Introduction', in A. Byrne & D. R. Hilbert (Eds.), *Readings on Color, Vol. 1: The Philosophy of Color* (pp. 257-268), Cambridge: MIT Press.
——— (2002). 'Philosophical Issues About Colour Vision', in L. Nadel (Ed.), *Encyclopedia of Cognitive Science* (pp. 173-184), London: Macmillan.
——— (2007). 'Color Primitivism', *Erkenntnis, 66*, 73-105.
Campbell, J. (1993). 'A Simple View of Colour', in J. Haldane & C. Wright (Eds.), *Reality, Representation and Projection* (pp. 257-268), Oxford: Oxford University Press.
——— (2005). 'Transparency vs. Revelation in Colour Perception', *Philosophical Topics, 33 (1)*, 105-115.
——— (2006). 'Manipulating Colour: Pounding an Almond', in T. Gendler & J. Hawthorne (Eds.), *Perceptual Experience* (pp. 31-48), Oxford: Oxford University Press.
Gert, J. (2008). 'What Colors Could Not Be', *The Journal of Philosophy, 105 (3)*, 128-155.
Hacker, P. M. S. (1987). *Appearance and Reality: A Philosophical Investigation Into Perception and Perceptual Qualities*, Oxford: Blackwell Publisher.
Johnston, M. (1992). 'How to Speak of the Colors', *Philosophical Studies, 68 (3)*, 221-263.
Jackson, F. (1998). *From Metaphysics to Ethics: A Defence of Conceptual Analysis*, Oxford: Clarendon Press.
Jakab, Z. (2006). 'Revelation and Normativity in Visual Experience', *Canadian Journal of Philosophy, 36 (1)*, 25-56.
Kim, J. (1993). *Supervenience and Mind: Selected Philosophical Essays*, Cambridge: Cambridge University Press.
Lewis, D. (1995). 'Should a Materialist Believe in Qualia?' *Australian Journal of Philosophy, 73 (1)*, 140-144.
——— (1997). 'Naming the Colours', *Australian Journal of Philosophy, 75 (3)*, 325-342.
Matthen, M. (2005). *Seeing, Doing and Knowing*, Oxford: Oxford University Press.
Maund, B. (2012). 'Color', in E. Zalta (Ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy.* Retrieved from <http://plato.stanford.edu/entries/color/ > (accessed on 31, May, 2014).
McGinn, C. (1983). *The Subjective View: Secondary Qualities and Indexical Thoughts*, Oxford: Clarendon Press.
——— (1996). 'Another Look at Color', *The Journal of Philosophy, 93 (11)*, 537-553.
McLaughlin, B. P. (2003). 'The Place of Color in Nature', in R. Mausfeld & D. Heyer (Eds.), *Colour Perception: Mind and the Physical World* (pp. 475-502), Oxford: Oxford University Press,.
Stoljar, D. (2009). 'The Argument from Revelation', in R. Nola & D. B. Mitchell (Eds.), *Conceptual Analysis and Philosophical Naturalism* (pp. 113-137), Cambridge: MIT Press.
Strawson, G. (1989). 'Red and 'red'', *Synthese,78*, 193-232.
Thompson, E., Palacios, A. & Varela, F. J. (1992). 'Ways of Coloring', *Behavioral and Brain Sciences, 15 (1)*, 1-74.
Webster, W. R. (2003). 'Revelation and Transparency in Colour Vision Refuted: a Case of Mind/brain Identity and Another Bridge Over the Explanatory Gap', *Synthese, 133 (3)*, 419-439.
Yablo, S. (1995). 'Singling Out Properties', *Philosophical Perspectives, 9*, 477-502.
村田純一 (2002). 『色彩の哲学』, 岩波書店.

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕